

ある外交官OBの衝撃的な死

病をおしてまで、若人との対話に賭けたのは何故か

「その理由は第一に……」

予測不能な、劇的な事件が続発している昨今では、すこし古いはなしかもしれないが、今年の四月二十二日にひとりの外務省OBが世を去った。それは病床での死ではなく、ある研究会の席上での死だった。『朝日新聞』はわざわざ「研究会席上で倒れ死去」と小見出しをつけた。その研究会には、あとで聞くと私の知人がいく人か出席していたのだが、そのひとり、東京外大の中嶋嶺雄教授はそのときの模様を「ある外交官の死」と題して、『サンケイ新聞』の「直言」欄につきぎのように綴っている。

「……私は先週、衝撃的な出来事に遭遇した。去る四月二十二日午後、都内の民間研究所で、研修旅行に來日した韓国国防大学の一行が、日本側の国際問題専門家の意見を聴取するためのささやかな懇談会がおこなわれた。私も招かれて出かけたところ、最近の米日中間係を分裂させるために、ソ連が北朝鮮と組んでアフガニスタン同様に朝鮮半島に軍事介入する可能性いかん、という質問が韓国側から出されたところであった。これにたいして日本側の一人の紳士は、きわめて明解かつ理路整然と、『そんなことはあり得ない』と答えたのであった。その応答があまりに堂々としてい

佐瀬昌盛

(防衛大学校教授)

たので、私はいたく感銘し、『いま話しているのは誰ですか』と隣席の人にそっと尋ねたところ、元ベルリン総領事やフィンランド大使を勤めた国会図書館の上川洋氏だとのことであった。……外務省OBにも、こんな見方をする人があるのかと強い印象を受け、氏の顔を覗き込んだ途端に、同氏は『その理由は第一に』といったまま絶句し、その場に倒れられて、そのまま不帰の客となった……」

上川氏の死因は、心不全と発表されている。同氏は数年も前から、はっきりと心臓を病んでいた。キャリア外交官として、氏は一

戦や農村社会性質論戦においても、確実な資料に基づいて、封建制の実体を明らかにした者はいなかった。私の研究は、中国が全体として近代化への方向に進みつつあることを認めながら、地主＝小作関係や商業資本＝職人徒弟制などの封建的生産関係が、経済の根幹をなしており、従って村落やギルド等の社会体制の中に封建制が深く癒着していることを、村やギルドの規約などによって、明らかにしたのである。同時に商品経済が民衆の生活の中にも少しづつ浸透し、賃労働への傾斜も徐々に進行して行く中で、村の中に農民団体が、ギルドの中に職人ギルドが、次第に食い込んで行くのはさけられなかった。農民団体や職人ギルドは、本質的には封建体制の一環であるが、同時に封建制をくずして商品経済化を進めて行く役割を果していた。それらは国民革命の中で村公社・農民協会および同業公会・職人工会に発展して行くが、地主と農民および労資の衝突が深刻化する事は不可避であり、国民党と共産党の対立にまき込まれざるを得ないわけである。私の想定したこの歴史像は、1949年の革命でその正しさが裏付けられたが、私の調査結果がこの革命の必然性を豫言していたとも言える。封建制の実像は、毛沢東「農村調査」でも明らかになっていなかった。

農村なり革命なりを考える以上、私は当時から毛沢東に注目していた。『毛沢東研究序説』は、毛沢東選集の重要論文を、その論文の初出形態と対比しつつ、毛沢東の主張が歴史の発展につれて基本的に書きかえられて行ったことを、テキストクリティクにより解明した著作である。私の著書がでてから、多くの学者はこうした手法ないし手続をとる様になったが、それまでは誰も選集を唯一のテキストとして、それによって毛沢東をカリスマ的に扱う「研究」を発表していた。私の業績は国際的にも注目されて、第13回国際歴史学会議に招待され、『中国の民衆と権力』の要点を講演することが出来た。やがて中嶋嶺雄教授のおさそいで内閣官房（のち外務省）の国際問題懇談会委員となり、佐藤内閣及び田中内閣の外交政策に参画する様になった。こうして日中国交回復をむかえたわけであるが、多くの委員が英米派で、アジア軽視の発想が板についているのに驚かされた。